

P. B. シェリーとリー・ハント

——『無秩序の仮面行列』出版の背景

江澤美月

1. はじめに

詩人、パーシー・ビシュ・シェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822) は、トリー党の首相リヴァプール (2nd Earl of Liverpool, 本名 Robert Banks Jenkinson, 首相 1812-27) 政権下の 1819 年 8 月 16 日、今日「ピータールーの虐殺」事件として知られる治安当局が民間人 11 名を死亡させ、400 名以上が負傷した事件 (Matthew 98-99) に衝撃を受け、この事件を起こした政府に抗議する詩「無秩序の仮面行列 ("The Mask of Anarchy: Written on the Occasion of the Massacre at Manchester")」を制作した。当時イタリアに住んでいた彼は、この詩の発表を、雑誌『エグザミナー (Examiner)』の編集者 (1808-1821) であった知人のジェイムズ・ヘンリー・リー・ハント (James Henry Leigh Hunt, 1784-1859, 通称リー・ハント)⁽¹⁾に託したが、詩の発表を一任されたリー・ハントは、この時発表を控えたことが知られている (Donovan 27-29)。シェリーはこの三年後に急逝するが、リー・ハントがシェリーの遺志を継ぎ「無秩序の仮面行列」を出版したのは、それから更に 10 年経った 1832 年だった⁽²⁾。しかもこの時の詩では、シェリーが批判の対象とした二人の閣僚の称号部分が伏せ字になっている。この二名の閣僚が誰であるか明らかにされるのは、それから更に 10 年を経た 1842 年である (Shelley 2009 11, 12)。本論文ではこの遅きに失したと思われるリー・ハントによる「無秩序の仮面行列」出版を巡る事情について考察する。

2. 「無秩序の仮面行列」発表延期の背景

リー・ハントがシェリーの詩の発表を延期した理由を考察する前に、まず押さえておかなければならないのは、政府が「ピータールーの虐殺」事件で、民衆を抑圧

した背景である。これには、この事件の発端となったマンチェスターのセント・ピーター広場で行われた集会在、穀物法反対の気運が高まる中、議会改革運動と穀物法反対の運動が結びついた形で行われたことに注目したい。自由貿易主義に対し、保護貿易主義の性格を持つ穀物法は、1815年3月トーリ党が支持母体である地主階級優遇制度として導入したものである（川北 272）。過激化したフランス革命政府への宣戦布告から皇帝ナポレオン・ボナパルト（Napoléon Bonaparte, 1769-1821, 第一帝政 1804-15）との戦争へと変質した長期にわたるフランスとの戦争の間、ナポレオンによる大陸封鎖と飢饉による穀物価格上昇の恩恵を受けたのは、農業生産者であり、彼等から地代収入を得ていた地主であった（金子 1996 23-32）。この間行われた耕作地の拡大（金子 1996 32）と戦争が終結に向かい、アメリカやバルト海諸国から穀物の輸入が見込まれるようになると（金子 1996 30）、穀物価格が下落し、深刻な農業不況に陥る危険性があった（金子 1996 32）。こうした状況下において、トーリ党のリヴァプール内閣（1812-27）は、ナポレオン戦争末期の 1815 年 3 月、戦後に到来が予想される農業不況を見越し、国内の穀物価格が上昇するまで、外国産の穀物の輸入を禁止する穀物法を制定したのである。これにより、国内の小麦の価格が 80 シリングを超えるまで、外国産の小麦の輸入が禁止されることになった。

その結果、穀物法は、労働者階級の生活のみならず、中流階級の経営も圧迫し、そのことで更に労働者階級の生活を圧迫することになった。それというのも、高価な食糧購入を余儀なくされた労働者の生活費上昇により、人件費が増大したからである。そのため、経営難に陥った経営者の中には、経営難打開のため労働者の解雇および、労働者賃金の低下に踏み切る者が現れ、労働者の生活は、折からの不作と相まって更に圧迫される結果になった（川北 272）。

こうして穀物法の撤廃が中流階級を中心に要求されるようになるのだが、同法の撤廃は、当時のトーリ党政権にとっては、支持基盤を失う恐れがあるため出来ない相談であった。そのため、選挙法改正により、自分たちの生活状況を打開してくれる代表者を議会へ送り込もうとする動きが活発化していった。「ピータールーの虐殺」事件は、それを阻止しようとした政府が、力でもって抑圧しようとした結果起きたのであり、セント・ピーター広場に集結した群衆を武力によって解散させようとして起きた悲劇は、その犠牲者の多さから、ナポレオン軍に対し大勝利をおさめ

ながらも多くの戦死者を出したワーテルローの戦い（1815、英語読みではウォータールー）をもじり、皮肉を込めて「ピーターラーの虐殺」事件と呼ばれるようになるのである（Bieri 482）。

次に、この事件に対するリー・ハントとシェリーの反応を確認する。リー・ハントは、この事件に先立つこと半年前、1819年1月31日付の『エグザミナー』で、自分と同名の急進論者ヘンリー・ハント（1773-1835）がマンチェスターで国歌に表敬せず咎められたことを伝えている（Hunt XII 76）。そして「ピーターラーの虐殺」事件後の9月5日の『エグザミナー』では、この時逮捕されたヘンリー・ハントを擁護する記事を掲載し、集会で用いられた幟の中に「穀物法反対」の文字があったことを伝えている（Kucich and Cox 211）。リー・ハントはまた、事件直後の8月22日の『エグザミナー』で、集会がたとえ不法なものであったとしてもそれを不法として阻止することなく、幟に書かれた刺激的な文言が不法妨害の嘆願であったとしても、幟を道で奪うこともせずに軍隊を出動させ登壇者を逮捕させたと批判し「権力という厚かましい仮面を被った男たち」は、巡査や兵士が民間人の死傷者を出しても、遺憾の念を示さないだろうと、トーリ党の閣僚を激しく批判している（Kucich and Cox 205-6）。

一方、この日を含む「ピーターラーの虐殺」事件に関する『エグザミナー』の一連の報道を、長期滞在中のイタリアで知ったシェリーは、リー・ハントによるトーリ党批判に触発され、政治風刺詩「無秩序の仮面行列」を執筆した（Bieri 484）。同詩の冒頭でシェリーは、上述の8月22日の『エグザミナー』でリー・ハントが「権力という厚かましい仮面を被った男たち」と批判したリヴァプール内閣の閣僚を特定している。シェリーが批判の矛先を向けた閣僚は三人おり、その筆頭は、当時政府庶民院指導者であった、カースルレー（Viscount Castlereagh, 2nd Marquess of Londonderry, 本名 Robert Stewart, 1769-1822）であった。

私は途中で虐殺に会った――

彼はカースルレーのような顔をしている――

とても魅力的に彼は見えた、しかし残酷だった、

七匹の猟犬が彼の後に付いていた、

猟犬たちは皆太っていた、そして猟犬たちは当然のことながら
見事な忠誠心を示していた
なぜなら一つずつ、そして二つずつ、
彼は猟犬に、噛み砕くための人間の心臓を
投げてやったからである
心臓を彼は幅広のマントから引っ張り出した。(Donovan 37) ⁽³⁾

ここには「ピータールーの虐殺」事件のみならず、数多くの民衆弾圧を行い「血の
カースルレー」と恐れられた (Tuite 97-98) カースルレーの姿が描かれている。
そのカースルレーに「虐殺」の烙印を押したシェリーの詩は (Bew 463)、彼を弾
圧の責任者として痛烈に皮肉り (Matthew 99)、彼を圧制者としてイギリスの政治
史上不朽のものにしている (Bew 464)。また、カースルレーの後についている 7
匹の猟犬は、イギリスに従って奴隷制廃止を延期したオーストリア、フランス、ロ
シア、プロシヤ、ポルトガル、スペイン、スウェーデンを示すと解釈されているが
(Donovan 37) ここにはウィーン会議で全権大使を務め、列強の勢力均衡のために、
アンシャンレジームを復活させたカースルレーの姿が現れている。

二人目は、大法官であったエルドン (1st Earl of Eldon、本名 John Scott, 1751-
1838、大法官 1801-06, 1807-27) であり、彼は「欺瞞」の姿で描かれている。

次に欺瞞が来た、欺瞞は
エルドン卿のように、アーミンの毛皮の法服を着ていた。
彼の大きな涙の粒は、上手に泣いたために、
落ちる時、礫臼に変わった。

そして幼い子供たちは
彼の足の周りを行ったり来たりして遊び、
涙を宝石のようだと思っていたが、
礫臼に変わった涙で、頭を打ちのめされた。(Donovan 38)

「ピータールーの虐殺」事件の犠牲者は、大人に留まらず、子供も含まれていたこ

とを、シェリーは、エルドンの残酷さの証左として伝えている⁽⁴⁾。1832年版では、二行目の「エルドン卿のように」の部分が「エ——卿のように（“Like Lord E——” Shelley 1990 3）」と伏せ字になっている。

三人目は首相経験のある内務大臣のシドマス（1st Viscount Sidmouth, 本名 Henry Addington, 1757-1844, 首相 1801-04）であり、彼は「偽善」を擬人化した姿で描かれている。

聖書を持ち、まるで光と

夜の闇を纏ったような

シドマスに似た偽善が

クロコダイルの上に乗って通り過ぎた。

(Donovan 39)

ナポレオン戦争後の政治そして経済状況再編のもと、シドマスは国内の急進活動を取り締まるためにスパイや密告者のネットワークを統括していた（Donovan 182）。当時、ジョージ三世（George III, 1738-1820, 在位 1760-1820）は病床にあり、のちのジョージ四世（George IV, 1762-1830, 在位 1820-30, 摂政 1811-20）が摂政を務めていたが、1817年、摂政の馬車が襲撃された時に（川北 273）、シドマスはフランス革命時の戒厳令下と同様、人身保護条例の停止を要求している（Donovan 182）。人身保護条例とは、1628年権利の請願として貴族院からチャールズ一世（Charles I, 1600-1649, 在位 1625-49）に提出され、国家による国民の取り締まりを防いできた法である（Hampsher-Monk 24n. 52, Roe 28）。このように国民の権利が蹂躪される中、「ピータールーの虐殺」事件は、議会改革に反対であったシドマス（Donovan 182）が、マンチェスターの治安判事と民兵に、摂政の攻撃容認を伝える手紙を送ったことにより起きたものである（Donovan 31）。この事件の後、シドマスはさらに議会が強制的な法を制定することを主張し（Donovan 182）。彼の主張は50人以上の集会や武器所有の禁止の他に、王室や政府や既存の教会を批判する煽動的な文書の執筆、印刷、発行を禁じる「治安六法」として結実した⁽⁵⁾。1832年版では、上の引用の一行目の「聖書」、そして三行目のシドマスが伏せ字になり「***に似た（“Like***” Shelley 1990 4）」となっている。

この三人の閣僚の後に死を象徴する骸骨として無秩序が登場するが、シェリーの

伝記を執筆したビエリはこれを、摂政を皮肉ったものと指摘している (Bieri 487)。

最後に無秩序がやって来た、無秩序は
白い馬に乗り、血を浴びていた
無秩序は唇まで真っ青だった、
黙示録の死のように。

そして無秩序は王冠を被っていた
そして輝く王笏をしっかりと握っていた
額に刻まれた銘を私は見た

「我は、神であり、王であり、そして法である」 (Donovan 40-41)

ここには、摂政が政権による権力の暴走を容認することで、地位の安定を保っていることが描かれている。上述したように、「ピータールーの虐殺」事件は摂政が許可を与えることで断行された (Donovan 31)。この摂政を守護するリヴァプール内閣の体制は盤石であり、リー・ハントはシェリーが読んだ 1819 年 8 月 22 日の『エグザミネー』で (Bieri 484)、「並外れた栄えある国家政体であると確信し、享受しているので、[閣僚たちは] 摂政の宮の政府を最大限の力を駆使して喜んで自ら御支え申すのである。」という『クーリエ (Courier)』の記事を引用した上で、「我々は、[閣僚たち] が、もし「並外れた栄えある国家政体」ではないと「確信し」「享受」しなかったら、「喜んで自ら御支え」しないだろう、と結論づけられる」(Kucich and Cox 208) と、閣僚たちが摂政を都合よく利用していることを皮肉っていた。

リー・ハントが「無秩序の仮面行列」の発表を控えたことには否定的な意見もあるが (Hay 174-175)、この時この詩を発表することは、極めて困難であったと言わざるを得ない。「ピータールーの虐殺」事件のきっかけとなった集会が、穀物法の廃止を視野に入れ、労働者階級を含めた選挙法改正を求める集会であったことを考えると、シェリーの詩は、広くは普通選挙を求める詩と解釈出来ようが、カースルレー、エルドン、シドマスと在職の閣僚の称号を具体的に挙げているので、個人攻撃の誹りは免れ得ず、この事件をきっかけに治安六法の制定が見込まれていた当

時は、処罰の対象になることは必至であったと言える。それというのも、8月22日の『エグザミナー』は、この事件を批判した庶民院議員フランシス・バーデット (Francis Burdett, 1770-1844) が全ての議員に対して書いた公開書簡を掲載すると共に、バーデットが文書扇動罪で告訴されたことを報じているからである (Bieri 484, Hunt XII 551)。しかし、リー・ハントは、「無秩序の仮面行列」の出版は思いとどまったものの、事実報道という形で政府批判を続けた。彼は、『エグザミナー』で12月末に制定が見込まれていた治安六法に反対の意向を示している (Hunt XII 769-771, 785-786)。

3. 「無秩序の仮面行列」出版のいきさつ

(1) 1832年版(初版)出版の背景

「ピータールーの虐殺」事件を契機に作られた治安六法は、リヴァプール政権が、急進的な運動が表面的に抑圧されたとみなした1820年までその猛威を振るったが、その間多くの人が反逆罪で起訴され、中には死刑判決を受けて実際処刑された例もあった。また、植民地へ流刑になった例も数多くあったことが指摘されている (Matthew 99)。

リー・ハントが1822年7月8日のシェリーの死後もしばらく封印していた「無秩序の仮面行列」を1832年出版に踏み切った背景には、選挙法の改正があることが指摘されているが (Seymour 237)、それでも依然として表現および言論の自由に至っていないことを1832年版の伏せ字は示している。それに加え、リー・ハントは、民衆に制度の是正を呼びかける共和主義的なシェリーの詩を、まず中流階級の男に選挙権を与えるこの時期の選挙改正に合うようにすることを必要とした。そのことは、彼がこの詩につけた序文によって示されている。

はじめにリー・ハントは、シェリーがこの詩を書いた時期は、「1819年マンチエスターで起きた流血の惨事の時」であると述べ (Shelley 1990 v) 執筆動機が「ピータールーの虐殺」事件であることを明らかにしている。次にリー・ハントは、当時『エグザミナー』の編集者であった自分にこの詩が送られてきた (Shelley 1990 v) と入手の経緯を明らかにしている。その上でリー・ハントは、当時掲載しなかった理由を次のように説明している。

私はシェリー氏の詩を『エグザミナー』に掲載しませんでした。なぜなら当時大部分の民衆は、燃えるような服を纏って歩いているこの詩の精神の明け透けさや同情的であることを十分に理解することが出来ないと思ったからです。シェリー氏の愛は、蔑みよりも強いのです。しかし、苦しめられている側の人々でさえも、常になく感情に任せ、それが何かわからないひどい苛立ちの中で判断すると、よしとしていたことに対して、百倍怒りを感じてしまうものなのです。そのため、私は、共通の敵が、危害を与えるためにその誤解を利用することを恐れました。

(Shelley 1990 v-vi)

リー・ハントは、苦しめられている民衆は突如暴走することがあり、「無秩序の仮面行列」がその引き金になる可能性があったこと、そしてそのことが自分たちにとっても民衆にとっても処罰の口実になりかねなかったと告白している。それというのも、この詩の最後は、

立ち上がれ、まどろみから覚めたライオンのように
征服不可能な数で！
鎖を地面に払え
寝ている間に降りた露のように
君たちは大勢——彼等は少数だ。

(Shelley 1990 47)

と、民衆を鼓舞する言葉で終わっているからだ。そこで、リー・ハントは、序文で、この詩の目的が「トーリ党の譴責と無効化」(Shelley 1990 x) であることは認めながらも、次のように述べている。

多数派に抗議する形をとり、抵抗のために静かで、合法的な、毅然とした備えをすること、すなわち多数派に反対する少数派、独占主義という甘やかされた子供に反対する単純過酷な労働の従事者、トーリ性に対抗する人間性。詩人が直接行動的な抵抗をすべきではないと忠告していることは確かであります。

(Shelley 1990 x-xi)

リー・ハントは、ここでシェリーの意図が「直接行動的な抵抗」すなわち武装蜂起、ではないことを強調し、合法的な抗議の仕方があることを示唆している。そのやり方として、彼は選挙法改正の話へと入っていき、シェリーが議会改革を望んでいたその証左として彼が1817年に執筆したパンフレット『王国全土で参政権改革を行う提案 (*A Proposal for Putting Reform to the Vote Through the Kingdom*)』から次の一節を引用している。

普通選挙権に関しては、私はその採用は、公衆の知識と感情の準備が整っていない現状では、危険を伴った方法であると考えていることを告白する。私は直接税を多少なりとも納めていることで名前が登記簿に記載されている人たち以外は、現在のところ議会に議員を送るべきではないと考えている。全ての成人男性に直ちに選挙権を拡大した結果は、隷属の時代によって野蛮で、無気力で、獐犁に仕向けられてきた人の手に権力を持たせることになるだろう。これは扇動家の部類に属する人たちが、立法府議員になることを、想定している。私はカートライト少佐の議論には反駁できないと思う。理論的には、全ての人が政権運営に携わる権利を持っている。さらに私はペイン氏の議論もまた反駁出来ないと思う。抽象的な共和国であるならば、非常に明白で魅力的な推論によって社会的序列のシステムが、幸福を作り出し、本当に傑出した人を抜擢するのに最適であることが示されるかも知れない。それでも、公衆の心が数世代の進歩を通して揺籃期のシンボルを顧みなくてもよくなる成熟期に達する前は、我々の社会の組織形体の王と貴族の部分を廃止すべきとする構想よりも、道理に適うことが可能なものは、もしくは、有益な決着点というごくわずかな希望を与えることが可能なものは、何もないだろう。(Shelley 1990 xxvii-xxix, cf. Shepherd 365-366 下線の強調はリー・ハントによるもの)

このようにリー・ハントはシェリー自身の言葉を借りて、彼が、一度にではなく、段階的に選挙権を拡大させていくべきであるとの考えを持っていたことを示している。しかし、この引用部分は、ジョン・カートライト (John Cartwright, 1740-1824) やトマス・ペイン (Thomas Paine, 1737-1809) の名前を出すことで、シェリーの急進性が示されている部分でもある。カートライトは、「ピータールーの虐

殺」事件で取り締まりの対象となった集会に招聘されていた普通選挙権論者であり (Kucich and Cox 203, 400 n. 6)、シェリーはここで「全ての人が政権運営に携わる権利を持っている」というカートライトの考えに賛同しているからだ。同時に、彼は、フランス革命時のイギリスで、党派を問わず危険視されたペインの思想を参照している⁽⁶⁾。しかしシェリーは、ゆくゆくはペインが主張する共和国形体になることが理想であるとしながらも、改革をソフトランディングさせるために、現時点では王政が最善との見方を示している。そしてリー・ハントは、このペインの考えは理想論であるというシェリーの考えを斜字体にすることで強調している。(49 ページの引用では下線部分に該当する。) そうすることで、彼は本論文で先に引用した摂政の描写や詩の最後の部分に、備えたのかもしれない。1832 年版でリー・ハントは、この時既に故人となったカースルレーと摂政の部分は、手を加えず、存命中のエルドンとシドマスは称号の部分を伏せているので (シドマスの場合には、称号のみならず「聖書」という言葉を伏せたので、エルドンよりもさらに誰であるかわかりにくくなっている)、ナポレオン戦争後、絶対王政を復活させたカースルレーとその暴走を止められない摂政、すなわち「無秩序」に読者の注意が集中する効果が生まれている。

(2) 1842 年版出版の背景

1842 年版はトーリ党と穀物法との関連から言えば、穀物法が廃止され、トーリ党が分裂する政治情勢を背景としている (cf. Lusztig)。ここでも、引き続き言論および表現の自由の観点から眺めると、この版に先立つシェリーの妻メアリ (Mary Wollstonecraft Shelley, 1797-1851) の『パーシー・ビッシュ・シェリーの詩 (*The Poetical Works of Percy Bysshe Shelley*)』の再版 (1840)⁽⁷⁾は、二名の閣僚の称号はそのまま伏せ字であるものの (Shelley 1840 231)、「無秩序の仮面行列」を含む「1819 年に制作された詩の註」で、シェリーが共和主義者であり、民主主義を愛していたことを明らかにし (Shelley 1840 251)、1832 年のリー・ハントの序文から一步踏み込んだものとなっている。そしてリー・ハントは穀物法が廃止される 1842 年に、伏せ字となっていたトーリ党の二名の閣僚の称号を明らかにするわけだが、直前のメアリの版と 1842 年のリー・ハントの版の間にはわずか 2 年しかない。彼はどのようにしてそれを可能にし、また何を見据えて再版したのだろうか

か。この時、彼が行った重大な決断は、1842年の再版を、それまで依頼してきたエドワード・モクソン（Edward Moxon, 1801-1858）から変更し、チャーチストであるジェイムス・ワトソン（James Watson, 1799-1874）に委ねたことである⁽⁸⁾。リー・ハントはその後も自分の著書の出版はモクソンに依頼し、書評でも「詩人側にとった出版者」であるとモクソンへの賛美を惜しんでいないので（[Hunt] 1844 93）⁽⁹⁾、両者の間の関係がこじれたとは考えにくい。そこで注目されるのは、この頃モクソンが巻き込まれた訴訟事件である。彼は1841年6月23日、上述したメアリの『パーシー・ビッシュ・シェリーの詩』の再版（1840）に「マブ女王（*Queen Mab*）」（1813）の完全版を掲載し、無神論的であるという理由で起訴されているからである（White 35）。

この事件は、「マブ女王」に関してのものなので、一見「無秩序の仮面行列」とは関係がないように思える。しかし、訴訟をはじめたヘザリントンがチャーチストであり（Linton 45）、1842年版の「無秩序の仮面行列」を出版したワトソンと共に活動していたとなると話は違ってくる。

この裁判に注目したニューマン・I・ホワイト（Newman I. White）は、この再版でシェリーの「マブ女王」を無神論的として冒瀆罪でモクソンを告訴したヘザリントンが、実はシェリーをさらに急進的にしたような人物であり、ちょうどこの頃、補佐役であったワトソンに『マブ女王』を出版させていることを指摘している（White 39）。ホワイトは、その後数件の似たような冒瀆罪の訴訟を経て、次第に冒瀆罪自体が意味を失っていくことから、ヘザリントンを中心とした急進的な出版者が、シェリーの作品の裁判を契機に、言論の自由を獲得していったと論じている（White 44-47）。このことを踏まえ本稿では、リー・ハントがチャーチストであるワトソンにシェリーの「無秩序の仮面行列」を選挙法改正促進の書として提示した1832年版の再版を託していることを、1842年を境に、選挙法改正運動の中心が中流階級から離れ、労働者階級へと移ったことを示す一例として考察したい。

問題は、なぜこの時期にヘザリントンとワトソンがシェリーの著作出版に動いたかであるが、その契機は、ヘザリントンが訴えたモクソン版の「マブ女王」に寄せたメアリの註にある。メアリはここに、無神論的と批判されたシェリーの詩は、実は彼自身が未成熟なものとして発表を望まなかったことを示す手紙を加えているが、この詩は、元来は、シェリーが1821年6月22日付で、『エグザミナー』編集者、

つまりリー・ハントに送った手紙であった。その中で、シェリーは、当時「マブ女王」の海賊版がロンドンで出回り、それに対する政府の取り締まりが強化されていることについて心を痛めていることを告白している。

「マブ女王」と題された詩は、18歳の時に私が書いたもので、敢えて言うならば、非常に過激な気持ちに駆られて書いたものですが、——しかしその時は発表の意志はなく、ほんの数部が刷られて私の個人的な付き合いのあった友人に配られただけでした。私はこの時のものを何年も見ていません。私はこの作品が文学作品としては全く価値がなく、道徳的そして政治的な考察についても、形而上学的、そして宗教的な教義についても、まだ生硬であり、未成熟ではないかと思っています。私は宗教的、政治的、そして国内の抑圧に心から反対しています。私がこの出版を悔やむのは、文学的な虚栄心からではありません、それが、自由という神聖な目的に資するよりも、むしろその目的を損なう方に効果があると思うからです。私は、販売自粛命令のために大法官庁に自分の弁護士を向かわせました、しかしサウジー氏の『ワット・タイラー (Wat Tyler)』という先例があった後ですから（この詩は同じ頃に同様の無分別な熱情に駆られて書かれたものだと思いますが）上手くいくことが望めないでいます。

(Shelley 1840 40)

その頃は治安六法による取り締まりがまだ冷めやらない中であったが、自分の作品が原因でその出版者が罰せられることを、少しでも防ぎたいというシェリーの義侠心にほだされたのだろうか。リー・ハントは、シェリーが書いた『「エグザミナー」編集者への手紙』を「1821年7月15日付の『エグザミナー』に「マブ女王とその作者」と題し掲載した (Hunt XIV 443)。

この詩を『パーシー・ビッシュ・シェリーの詩』に挿入したのは、メアリの意思だったのだろうか。ここで気になるのは、メアリがこの詩集の初版の後にリー・ハントに送った手紙である。1839年7月20日彼女は彼に対し次のように弁解している。

おそらくあなたは、ご自分が難点を示した一節に私が説明を加えなかったことについて御立腹のことと思います。私はついすっかり失念してしまったことを

悔やんでいます——そして別の版で変更しようと思っています。皆それぞれ印刷したいと思うものに理由があると思うのですが、私は、自分の中で、世間に対して、否、批評家に対しての説明ができないのです、ですから、注意を引くとは思えないことをわざわざ説明し考えることはしませんでした。

(Bennett II 318)

この手紙は、「無秩序の仮面行列」に関するものとみられているが (Bennett II 318 n. 1)、メアリは何について説明しなかったのだろうか。リー・ハントが当時公表しなかった理由は、彼が既に 1832 年版の序文で明らかにしていることである。それでは伏せ字についてかと思えると再版でメアリが二人の閣僚の称号を明らかにしていないので、これも違う。そこで、初版と再版の間に起きた大きな変化であること、再版の後に「マブ女王」に対して無神論的との批判が出ていることを考えると、上に引用したシェリーの手紙に辿りつく。それというのもモクソンを弁護したトーマス・ヌーン・タルフォード (Thomas Noon Talfourd, 1795-1854) は、「マブ女王」はシェリー自身が未成熟なものと見做していたこと、この手紙がシェリーの無神論性を否定する証左であると述べているからだ (White 36, Townsend 375)。しかし、この段階のメアリはこの手紙は「マブ女王」を出版することを諫めているのだから、「マブ女王」を出版すればもう必要ないと考えていたかも知れない。一方リー・ハントにとっては、この手紙は、「マブ女王」の無神論性を否定する証左になり得ると同時に、改革者に対して性急な運動を諫めるメッセージの方が重要であったと考えられる。このメッセージは、「無秩序の仮面行列」の序文に通底するものがあり、この序文をつけてリー・ハントは、ワトソンにこの詩の出版を託しているからである。

4. おわりに

本論文では、リー・ハントがシェリーの遺稿「無秩序の仮面行列」を、1832 年と 1842 年に出版した意義について考察した。同詩は、当時『エグザミナー』の編集者であったリー・ハントが行った「ピータールーの虐殺」事件報道に、シェリーが触発されて制作したものである。シェリーの詩は、広い視座に立てば、ナポレオ

ン戦争後の経済を逼迫していた穀物法の廃止、そしてその手段としての普通選挙の実現を目指したものと言えようが、当時の政権の閣僚を名指しして批判している向きもあり、リー・ハントは、政府批判を禁じる治安六法の制定が見込まれる中、公表を抑えたと考えられる。同詩は、選挙法改正の1832年に発表されたことが知られているが、本論文では、この時、選挙法に特に反対した議員の称号が伏せ字になっていること、リー・ハントが序文をつけ、その中でシェリーの『王国全土で参政権改革を行う提案』を引用し、著者自身が段階的な普通選挙の実現を求めていることを示していることから、選挙改革に大きな抵抗があると同時に、この段階においても言論、表現の自由が担保されていないことを考察した。

1842年の完全版は、穀物法の廃止を背景に、シェリーの妻メアリが、1839年『パーシー・ビッシュ・シェリーの詩』の再版で、シェリーが共和主義者であることが明かにされた後に出版されているが、本論文では、特にメアリがこの後巻き込まれた同詩集の出版者モクソンの裁判を契機に、リー・ハントが出版者をチャーチストであるワトソンに託した意味を、シェリーの手紙との関連から考察した。かつて急進主義者の活動を諫めたシェリーの手紙は、その原因となった「マブ女王」の再版によって急進主義者の活動を解禁させたと考えられる。そしてそれを仕掛けたのは、シェリーの手紙の効力を知っていたリー・ハントであり、彼は、1832年に選挙法改正の書として提示したシェリーの「無秩序の仮面行列」をチャーチストの手に渡すことによって、普通選挙への彼等の道筋を示したと考えられる。

註

- (1) ハントの通称に関しては、本稿でも言及する同時代の急進的活動家ヘンリー・ハント (Henry Hunt, 1773-1835) と区別するためリー・ハントの通称を用いる慣例に本稿も従う。
- (2) 1832年版では原題の Mask が Masque に変更されている (Donovan 36 n. 236)。
- (3) シェリーの詩の訳は、小林龍一氏の訳 (「シェリーと3人の閣僚たち」『大阪経大論集』第62巻、第3号、2011年、9-20頁)、アルヴィ宮本なほ子氏の『対訳シェリー詩集——イギリス詩人選 (9)』岩波書店、2013年を参考に筆者が訳した。
- (4) シェリーが、大法官であったエルドンを批判した個人的な要因として彼がエルドンの判決によって1817年3月27日、前妻ハリエット・ウェストブルック (Harriet Westbrook) との間に生まれた子供の養育権を奪われたことが指摘されている (Donovan 38, Bieri 487) が、ここでは立ち入らない。

- (5) 治安六法については、*English Historical Documents 1815-1870, being a selection of documents from English Historical Documents volume XI and XII (I)* Methuen, 1964, pp. 26-32 参照。
- (6) ペインは、フランス革命時、『フランス革命についての省察 (*Reflections on the revolution in France, and on the proceedings in certain societies in London relative to that event. In a letter intended to have been sent to a gentleman in Paris*)』(1790) を著し、暴徒化した民衆が王権を倒したことを指摘しフランス王妃、マリー・アントワネット (Marie Antoinette, 1755-1793) に同情したホイッグ党のエドモンド・バーク (Edmund Burke, 1729-97) に対し、虐げられた民衆の側に立ち『人間の権利 (*The Rights of Man*)』(1791-92) で「我々は羽の美しい鳥のことは同情するが、死にかけている鳥のことは忘れている」と反論した。そのためペインの著書は、政府批判の書として発禁になり、同書を執筆したペインのフランス亡命後も彼に対する欠席裁判が行われ、有罪判決が出されている (Barrell and Mee, *Trials* xix)。
- (7) この版の扉の出版情報は 1840 年になっているが、実際発行されたのは、1839 年 11 月であることが指摘されている (Donovan xxxv)。
- (8) ワトソンの伝記を書いたウィリアム・ジェイムス・リントン (William James Linton, 1812-97) はワトソンを、この後本論文に出てくるヘンリー・ヘザリントン (Henry Hetherington, 1792-1849)、そして穏健で中流階級との関係を重視するウィリアム・ラヴェット (William Lovett, 1800-77) と共に「真のチャーチスト」と定義し、強硬なファーガス・エドワード・オコンナ (Feargus Edward O'Connor, 1794-1855) と対置している (Linton 45, cf. 川北 285)。なお、リントンを介してリー・ハントは、ワトソンに再版の許可を与えている (E. M. Gates 394)。
- (9) この書評は無署名であるが、C・パットモアのひ孫であるデレク・パットモア (Derek Patmore) が、『エイズワスズ・マガジン (*Ainsworth's Magazine*)』にリー・ハントによる書評があると指摘している。彼がリー・ハントのものとして引用している文章は、この書評の文章と一致する (Patmore 47, [Hunt] 1844 93)。

引用文献

- Barrell, John and Jon Mee, editors. *Trials for Treason and Sedition, 1792-1794*. Pickering & Chatto, 2006.
- Bennett, Betty T., editor. *The Letters of Mary Wollstonecraft Shelley*. 3 vols. The Johns Hopkins UP, 1980-1988.
- Bew, John. *Castlereagh: A Life*. Oxford, 2012.
- Bieri, James. *Percy Bysshe Shelley: A Biography*. The Johns Hopkins UP, 2008.
- Donovan, Jack, Cian Duffy, Kelvin Everest and Michael Rossington, editors. *The Poems of Shelley: 1819-1820*. Vol. 3. Longman, 2011.
- Gates, Eleanor M., editor. *Leigh Hunt: A Life in Letters: Together With Some Corre-*

- spondence of William Hazlitt*. Falls River, 1999.
- Hampsher-Monk, Iain, editor. *Edmund Burke: Revolutionary Writings: Reflections on the Revolution in France and the first Letter on a Regicide Peace*. Cambridge, 2014.
- Hay, Daisy. *Young Romantics: The Shelleys, Byron and Other Tangled Lives*. Bloomsbury, 2010.
- [Hunt, Leigh]. "Poems By Coventry Patmore." *Ainsworth's Magazine*, vol. 6, July 1844, pp. 93-94.
- , editor. *The Examiner volume XII 1819*. Pickering and Chatto, 1998.
- , editor. *The Examiner volume XIV 1821*. Pickering and Chatto, 1998.
- Kucich, Greg, and Jeffrey N. Cox, editors. *The Selected Writings of Leigh Hunt*. Vol. 2, Pickering and Chatto, 2003.
- Linton, James William. *James Watson: A Memoir*. Appledore Private Press, 1879.
- Lusztig, Michael. "Solving Peel's Puzzle: Repeal of the Corn Laws and Institutional Preservation." *Comparative Politics*, vol. 27, no. 4, July 1995. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/422226.
- Matthew, Colin, editor. *The Nineteenth Century: The British Isles: 1815-1901*. Oxford UP, 2000.
- Patmore, Derek. *The Life and Times of Coventry Patmore*. Constable, 1949.
- Roe, Nicholas. *Fiery Heart: The First Life of Leigh Hunt*. Pimlico, 2005.
- Seymour, Miranda. *Mary Shelley*. Grove, 2000.
- Shelley, Percy Bysshe. *The Masque of Anarchy 1832*. Woodstock Books, 1990.
- . *The Masque of Anarchy: To Which Is Added Queen Liberty; Song—To The Men Of England*. Ed. Leigh Hunt. 1842. Kessinger, 2009.
- . *The Poetical Works of Percy Bysshe Shelley*. Ed. Mrs. Shelley. London: Edward Moxon, 1840.
- Shepherd, Richard Herne, editor. *The Prose Works of Percy Bysshe Shelley*. Vol. 1. Chatto and Windus, 1810.
- Townsend, William C., editor. *Modern State Trials*. Vol. 2. London: Longman, Brown, Green and Longmans, 1850.
- Tuite, Clara. *Lord Byron and Scandalous Celebrity*. Cambridge UP, 2015.
- White, Newman I. "Literature and the Law of Libel: Shelley and the Radicals of 1840-1842." *Studies in Philology*, vol. 22, no. 1, January 1925, pp. 34-47. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/4171904.
- 金子俊夫『イギリス近代商業史——反穀物法運動の歴史——』白桃書房 1996 年。
- , 「穀物法問題と Manchester 自由貿易運動の登場」『経営論集』第 69 号 2007 年 75-88 頁。
- 川北稔編『新版 世界各国史 11 イギリス史』山川出版社 2011 年。